

「文香さんは、眼鏡をかけたりはしないんですか？」

昼が過ぎ、夕刻が近づいた時間。

傾いた太陽がビルの影を落とす社内カフェの窓際の席で、橘ありすはふと浮かんだ疑問を、言うか言うまいか、一瞬の迷いの後に吐き出していた。

その正面に座る鷺沢文香とは言えば、彼女の疑問を受けて、サンドイッチに伸ばしかけていた手を引っ込め、しばし思案する様子を見せた。

「そう、ですね……こうして本ばかり読んでいますから、今のように時折、聞かれる事もあります……幸い、特に視力が悪いと言う事もありませんから」

「あ、ごめんなさい。嫌な質問でしたか？」

「いえ、そんな事は。本の虫に眼鏡と言うイメージは昔からつきものですし……私自身にも、全くないとは言いませんから」

「……なら、よかったです。ただ、その、私が思ったのはそう言うのとはちょっと違って……」

「……と、言いますと」

「視力が悪いのを補正するためではなく、ファッションとして、です」

「ファッション……ですか？」

「はい」

文香の疑問に、ありすは小さく、しかし力強く頷いた。

その後でじつと苺パフェを凝視し、何かを思い出すように……と言うよりは、思い出した何かをどう話すかを考え始めたようだ。

顎に当てた手がわざとらしく、それが故に可愛らしい。

数秒して、考えがまとまったのか、クリームを一口運んだ後で、顔を上げた。

「実は先日、フレデリカさんと周子さんになにかこう、その場のノリで連行されて……」
「はあ……」

『連行』と言ってしまうと、いかに同性と言えど、年齢差的に一歩間違えたら誘拐事件の可能性さえ浮上してしまう。

だが、その口調や表情からはどこか呆れ気味である事は読み取れど柔らかさも感じられ、不快であつたと言うわけではなかったようなので、何となく相容れない、しかしそれはそれとして好ましいとは思いうタイプの人間に對しての、ありすなりの親愛表現なのだろうと文香は思っておく事にした。

ありすが素直ないい子である事を知っているからこそではあるが、ちよつとひねたところのある子供に對する大人の対処ではある。

変に指摘すると余計拗らすが、そのままにして置くと案外素直なところが伸びてくれる。

「その時に、変装が必要だと言う話になって、フレデリカさんが呼んでいた上条春菜さんにお

会いました……眼鏡について少しレクチャーして貰いました」

思っていたよりも深かったです、と簡潔に感想を述べ、ぱくりといちごを頬張り笑顔になる。文香もサンドイッチを一口運んでから、

「なるほど……上条春菜さんについては……直接は、すれ違った時に幾度か挨拶をした事がある程度ですが……その、眼鏡に対して並々ならぬ拘りを持たれた方だと言うのは、聞いた事があります」

ありすの述べた上条春菜について、知っている事を口にする。

文香自身はこれまで仕事でもプライベートでも直接関わる機会はなかったが、眼鏡に対する愛着一点だけで、社内ではかなり存在の知れている人物と言っている。

「それで……ありすちゃんは、その時に、ファッションとしての眼鏡に興味を持った……と？」

「興味を持った……と言うほどではありません。ただ、その……文香さんは、私よりもずっと似合いそうだなと、そう思ったんです」

「そうでしょうか……私なら、もし視力が悪くなっても、無難なデザインのものを選んでしまうでしょうし……凝ったデザインのものと、あまり似合うような気がしませんから」

「そ、そんなことはありません！ 文香さんならかつこいいものでもかわいいものでも、どんな眼鏡でもきつと似合います！」

「そうです！ 眼鏡の似合わない人なんていません！」

「……………」

力強く言い切ったところで突如聞こえた上条春菜の声に、ありすは驚き一瞬硬直した後、少し冷や汗をかきながら、テーブルの横に立つ彼女の顔を見上げた。

その後で、自らを落ち着かせるかのように「ふう……」とひとつ息を吐いてから、

「よし」

と呟き、行動を開始する。

「えーと……なんです橘氏、突然袖をまくったり襟の裏側を触ったりポケットの中を確認したりして」

春菜からすればありすの突然のよくわからない行動に、当然困惑するしかなかった。

ひとしきり自身の衣服を確認し、安堵の息を吐いて、ようやくありすは春菜の疑問に答える。

「いえ、その……あまりにもタイミングが良すぎたので……なにか仕掛けられているのかなと……あとその呼び方ならありすでいいですよ、もう」

が、逆にあるからすれば当然の行動と言うか、ある種の防衛本能に従ったものだった。

ふと眼鏡の事を話題にしたらこんなに都合よくやってくるのだから、失礼だとは思いつつも危機感を抱くのは仕方のない事である。

そんな風に警戒された春菜はと言えば、しかしさほど気にした様子もなくからからと笑って

大人になるために必要なのは何だろう。

それを考え始めたのがいつだったかは覚えていない。でも、小学校のクラスの子どもたちと同じように見られることがどうしても我慢出来なくなったことは覚えている。

意味もなく大声を出したり、がさつだったり、考えもなしに行動を起こす男子たちがまず嫌いになって、それから一人じゃ何も出来ない女子が嫌いになった。はっきり言えば低レベルな人が沢山いて、私は愛想を尽かしていた。

でもそれだけなら、まだ私は我慢出来たのかもしれない。嫌いなら嫌いで、関わらなければいいだけだから。

それよりも嫌なことだったのは、先生に私もその子どもの一人だと認識されていたことだ。それだけはどうしても嫌だったし、屈辱だった。

そんな時に、私はプロデューサーに出会った。正直、初めは乗り気じゃなかった。学校にいる人たちはこぞってテレビの話をしていたから、嫌いですらあった。

それでもアイドルの話を受けたのは、私が大人になるために必要な物の内の一つに自立があると思ったからだ。大人は皆仕事をして、その報酬としてお金を稼いでいるものだから、お金を稼げるようになれば認められると思った。更に言えば、音楽業界の仕事に将来就きたいからという希望があったから丁度良かった。

今にして思えば、それはいかにも単純で、いかにもお子様の考えだった。

「ふーふふふん、ふーふふふん」

やけにテンションの高い雫がそこにいた。

ソファーに腰掛けて、牛のぬいぐるみを膝の上に載せたまま何分も毛並みを整えていた。背中を一頻り撫で終わると、ぬいぐるみをひっくり返して、白と黒が入り混じったお腹を撫で始める。顔の方から尻尾まで撫で、また背中に戻り、と繰り返している。

雫の座っているソファーの横には先客としてありすが座っており、ありすはタブレットを見ているふりをして、そんな雫の動向を見守っていた。

雫の一連の動作に淀みはなく、至って自然といった様子だったが、繰り返し繰り返し同じことをしている雫をありすは見ないでいられたかった。明らかにテンションが高い。雫が笑顔でいるのはいつものことだが、ありすには今日の笑顔はいつもと質が違うように思えた。

しかし、何が起きてそこまでテンションが高いのかを把握することは出来そうもなかった。

雫はいつものようにラフな格好をしている。ブランド物でもなさそうなシャツにこれまた変哲もないジーンズ姿。派手なところは一つもなく、そのテンションの高さが外的なものではないことを表していたが、そうなるとお手上げだ。

しばらく様子を見守っていたあたりすだったが、やがて意を決したように口を開いた。

「……雫さん、なんだか嬉しそうですね。何かありましたか？」

「もぉー何があつたか、なんてものじゃないですよー」

「そうなんですか？」

「はいー」

雫は撫でていたぬいぐるみから手を離してショルダーバッグを引き寄せると、その中から一枚のチラシを取り出した。表面を隠すために裏面をありすに向けて、微笑んでいる。

「じゃじゃん」

雫の持っていたチラシが表になり、ありすの目に入ってきたのは、毎週日曜日あさ七時三十分公表放送中の文字。そして次に入ってきたのは大きな犬に、トップアイドルである我那覇響である。ありすも何度か見たことがある番組で、飼っているワニを響が連れてきた時は放送事故だと騒然となったことすらある。

「それ、我那覇響さんがやっている番組のチラシですよ。どうしたんですか？」

「プロデューサーさんが持ってきてくれましたー」

「よく取ってこれましたね……いつもは三十分番組だから、特番ですか？」

「そうですー。三十分も頂けるなんてすごいですよねー」

「響さん一人に一時間半もやらせてしまうのは大変ですからね。体力的にも厳しそうですし」

「やっぱり動物を相手にするのは体力要りますからー。私は大丈夫ですけど、ありすちゃんはどうですか？」

「体力に自信はありませんね。これでも昔よりかはついてきましたけど……」

「私もお手伝いしますから、頑張りましょうねー」

「ええ、がんばりま……ん？」

ハテナマークがありすの頭の中に浮かび上がる。

チラシを持つている雫はそれに気付かず、笑顔のままだ。雫から目を逸らすと、今度はチラシの響と目が合った。

「ちよつと待つてください……雫さんがお一人で出られるんですよね？」

「いえー。プロデューサーさんからはありすちゃんも出るって聞いてますー」

「……私のほうは聞いてませんが」

「ほんとですかー？ もしかしたら、サプライズするつもりだったのかもしれないねー。ネタバラシしちゃいました……」

「いえ。多分、連絡が遅れてるだけかと思いますが……」

——ただ動物と触れ合うだけなのに、ここまで雫さんが喜ぶだろうか。

ふと頭を過ぎた疑問。だが、次の瞬間にはありすの疑問は確信に変わっていた。視界の隅では、牛が天井にお腹を見せつけている。

「……私、牛のお世話出来ませんよ？」

「……」

じいー、という効果音が綺麗に当てはまるくらい、じいーとタブレットを見つめているのは橘ありすである。かれこれ、三十分になるだろうか。飽きもせず、時折眉をひそめたり、顎に指をやって何か思い悩むような仕草を見せたりしながら、静かに思索を巡らせている。

眼鏡を掛けて。

その斜向かいに座っている荒木比奈は、いつものように普通に眼鏡を掛けて、ソーシャルゲームに興じながら時折ありすの様子を窺っている。特に会話はなく、ありすが何に没頭しているのかも定かではない。ただ、まだ齢十二を数えるほどの少女が一所懸命何かに打ち込んでいるという姿が、まだ二十歳そこそこの荒木比奈の胸を打つのだった。

まだまだ若いつもりなんスけどねー、と人知れずソファの背もたれに身を預ける比奈は、事務所のドアがゆっくりと開き、見知った人物が現れるのを見た。

「……おはよう、ございます」

「おはようっス、文香ちゃん」

「あっ、文香さん。おはようございます」

ようやくタブレットから目を離し、おずおずと挨拶する鷺沢文香に会釈を返す。その際、掛けていた眼鏡をくいと押し上げるのも忘れない。

平静を装ってはいるが、タブレットを凝視していたためか爛々と輝いているありすの瞳は、

何をしていたのか聞いてくれと言わんばかりにその輝きを増していた。

一種の興奮状態であり、鼻息がふんふん出ていないのが不思議なくらいである。

「ありすちゃん、今は、何をされていたのですか……？」

「ええ、そうなんです」

答えになっていない。が、文香は特に指摘せず、ありすも気付いていない。

比奈は、なんとなく面白そうので事の成り行きを見守っている。

「実はですね、私、ドラマに出演することになりました」

「それは……おめでとうございます。ありすちゃん、大活躍ですね……素晴らしいです」

「いえ、決してそんなことは……他にも、ドラマに出ている方は大勢いますし……あの、て、照れます」

なんだろう、この微笑ましい空間は……と、比奈は自らが浄化される感覚を得た。

仮に、自分が某アイドルや某アイドルと会話したとして、このような慈しみ溢れる空間を構成することができたのだろうか。否、そんなことは不可能である。深夜アニメは好きだけど、年二回のお祭りにも行くけれど、それだけでは届き得ないものは確かにある。

と、ありすの若さに続き、二人の雰囲気さえも屈服を余儀なくされる比奈であった。

それはそれとして、成り行きは見守っていく。

「……え、ええと、そうです！ 私が抜擢されたのは、なんといえますか……文香さんほどで

はないにしても、橘ありすという知的なイメージの漂うアイドルに相應しい、そんな役で」

「……探偵、でしょうか」

「そうです、さすが文香さん！」

台詞から醸し出される太鼓持ち感が尋常ではない。

「何を隠そう、この眼鏡も比奈さんに見繕ってもらったのです！」

「隠すも何も、眼鏡なら事務所に腐るほどありますからね……」

誰のせいかは言わずともわかる。言うところなので誰も言わない。

ありすは赤いフレームのやや大きな眼鏡をくいくいつと押し上げ、褒められたがりの犬のよう
に文香を見上げる。それを悟って文香は「とても、似合っていると思います」と小さく笑い、
あります「……えへへっ」と年相應の笑みを見せる。

なんだこの空間は以下略、と比奈は隠し持っていたレッドブルの蓋を開けた。

「タイトルが『少女探偵・橘ありすの事件簿』って言うんですけど、わざわざ『少女』って言
わなくてもいいと思うんですよ。確かに、年齢だけ見ればしょうがないですし、ひょんなこ
とから探偵になった女の子が、数々の苦難を乗り越えながら事件を解決するというのが見
どころなので、間違っではないんですけど……」

ありすは少し悔しそうだ。

「……ありすちゃんは、そのドラマが何を見せたかったのか、というところまで分かっているの

すね」

「当然です。主役を任せてもらっている以上、本気でやらないとスタッフさんたちにも失礼ですから。……あと、プロデューサーさんにも」

最後に少し視線を外すありすを見て、文香は微笑む。

「ありすちゃん、偉いですね」

「……いえ、そんなことは」

文香の言葉を受けて、ありすはもじもじしている。

ずるいなあ、と比奈はレッドブルを呷りながら思った。ああいうふうに包み込まれたら、もう何も言えなくなる。ありすも自分がわがままを言っていることを内心理解しているから、下手に食い下がつて自分の心証を悪くしたりはしないだろう。

段々と、比奈は自分がここにいるのは場違いなんじゃないかという思いが強くなって、そろそろ立ち去ろうかとゆっくり腰を上げた。

すると、ありすが比奈の動きに気付いて先手を打つ。

「あつ、比奈さん、どうかされましたか？」

「えっと、まあ、いい時間なんで……」

ありすの視線が泳いでいるのを見るに、どうやら助けを求めていることがわかる。とはいえ、話題を振ってほしいとか間を取り持つてほしいとかいうことではなく、ただそこにいてくれる

「やっぱ私は、そういうのって本人の希望を優先すべきだと思います」

「でもさほら。本人の希望と向き不向きが一致しないことってあるじゃない？ あたしも和菓子屋の才能はなかったわけ」

「いや周子は別に和菓子屋志望ではなかっただろ」

「そういやそうだった」

「確かに、向き不向きっていうのはあると思いますけど……私も、体力勝負の仕事はちよつと……」

「そ、そんな目で見んなよ。藍子単独ならともかく、ポジティブパッションとして受ける仕事となると、どうしてもほら、そういうのがな」

「水着も……」

「それはそういう需要があるんだ。主に俺の」

「プロデューサーのそういう正直な所、シューコちゃん好きだけど嫌いだなー」

「まあ藍子のことはおいおいな。今はありすの話をしよう」

休日の午前十時、文香がプロジェクトルームに入ると、テーブルを囲んで何やら議論が行われていた。ボードを見ると、千川ちひろの欄は出張・直帰とある。だからだろうか、プロデューサーは三人がけのソファにどっしりと座り込み、仕事をする様子はまるで見えない。

「……おはようございます」

「やあ、おはよう文香」

「おはー」

「おはようございます」

「お、おはようございます」

文香が挨拶をすると、めいめいに返す。

「あの、ありすちゃんが何か……？」

小首をかしげて問うと、プロデューサーは「ああ」と頷いてソファの空きを手で指し示した。
文香は黙って座る。

「気になるか？」

「それは……はい。ありすちゃんは、私のような者のことを慕ってくれる……その、大切な子
ですから」

「なるほどな」

プロデューサーは大きく頷いて続ける。

「実は今、ありすのプロデュース方針について、皆と相談していてな」

「プロデュース方針……ですか」

「そうだ」

プロデューサーは腕を組み、ソファの背にもたれかかった。

「サボっているわけじゃないぞ」

余計な一言を付け足す。

「はあ」

やや納得しがたいものを感じたが、文香は頷いておいた。藍子が後を引き取って続ける。

「ほら、ありすちゃん、いま私達と一緒に『アインフェリア』をやってるでしょう？」

「ええ、貴重な……経験です」

「あとはさー、アブナイにゲストで来た時のブラックなアレとかさ、つまり、そういうカッコいい系のアレで攻めていくべきかどうかというアレだよ」

「語彙力が低下してるぞ周子」

「マジカー。ガチでヤバイね」

「しばらく紗枝と組ませるべきか……？」

「ええと……？」

文香が困惑した様子を見せると、プロデューサーは「おっと」と居住まいを正す。

「お前と話してるとすぐ話が脱線しちゃうな」

「えー、あたしのせいなん？」

「ボケは控えめにな。まあ、アインフェリアも人気だし、そういう路線も悪く無いとは思うんだが」

プロデューサーはテーブル上のタブレット端末を手にとると画面を操作し、一枚の画像を示させた。

「この写真がなかなか話題でさ、仲良し姉妹みたいだつてな」

「姉妹……？ 藍子さんと、これは……これも確か、アインフェリアの時の、皆でピクニックに行った時……ですね」

「草花萌ゆる春の草原に、可憐な乙女が二人肩を寄せ合ってゝ的な？」

「急に語彙力が戻ってきたな」

「シューコちゃんに任せなさい」

またしても漫才を始める二人を他所に、藍子が説明する。

「この画像、事務所のサイトにアップしたら、ありすちゃんが可愛いって話題になったらしくって」

「確かに……可愛らしい、ですね。ロケーションと相まって、まるで妖精かなにかのよう……です」

「ですよね、ふふつ。ありすちゃんったら、指輪を作るのに黙々と手を動かしてて、横で見えて笑顔になっちゃいました」

「……そう……ですか」

文香はなにか言葉を探すように唇を震わせたが、結局ただ相槌を打った。

およそ現実とは思えないものを目の前にした時、人はどういふ反応をするのだろうか。踏みしめる地はなく、見上げる天もない。己という個を形成する全てを失い、意識だけの存在になったかのような感覚。

ただそこに在り、しかしそこには何も無い。

連綿と続く無の中で、今という瞬間がかりうじて繋ぎ止められているような歪さを感じながら、しかし橋ありすは慌てるでもなく、騒ぎ立てるでもなく、静かに、自然に、

——ああ、これは夢だ。

と、今自分の目の前にある“それ”をただ無感動に見ていた。

視ていた。

観測していた。

無限に広がる闇。星のような小さな煌めき。宇宙のただ中に放り出されたらこんな景色が広がっているのだろうかと思いつつも、ありすの意識は眼前の“それ”を捉えて離さない。

周りに比べるものが何もなく距離感が解らないために、それが小さいのか大きいのか、近いのか遠いのかも解らない。

両手で抱え込めるほどにも見えるし、一つの星に匹敵するほど巨大にも見える。

この空間と同じように、あるいは自分と同じようにその存在自体が不安定なのか、蜃気楼のように揺らめいて形は定まらず、明滅するように希薄になる。

ゆらゆらと。ゆらゆらと。

名状し難く。形容し難い。闇の中をたゆたう“それ”が何であるのかをありすは考え、そしてすぐにその答えが自分の知識の中に存在していることを知る。

果たしていつ知ったのか。どこで理解したのか。まるで誰かに記憶を上書きされたかのような違和感を覚えながらも、やはりありすの意識は“それ”を離せない。離れられない。

——門。

そんな知識の奥底から拾い上げた言葉を、声には出せないが意識ははっきりと答えた。

すると、それまで不安定だった目の前の“それ”は急速に形を成していき、ありすが言うところの“門”へとその存在を変えていった。

より明確に。より鮮明に。

だが、ありすの意識はそれを最後まで見届けることなく混濁し、まどろんでいく。

さながら自分の存在を“門”に奪われていくように。形を持たないありすの意識は、いとも容易く闇の中へと消えてしまう。

「……また、始まるのですね」

完全なる実態と成った門。その前の少女が一人。ありすだった何かが消えた先に流した囁きは、どこにも届かない。

☆

「うーん……」

事務所へと向かう道すがら、ありすはずっと考えていた。

いつ頃からか、夢を見るようになった。

それだけだと何を言っているのかと思われそうではあるが、問題はその内容なのだ。

楽しい夢とはとても言えない。けれど怖い夢かというと、そうでもない。不思議としか言いようのない、そんな夢。

夢の中でありすは宇宙の真ん中に放り出されたような真つ暗闇の中にいて、ずっと何かを見ている。それだけならば特に気にしたりもしないのだけれど、何度も繰り返し見るとなると話は別だ。

あまりにも何度も見えるおかげで、途中からありすは自分が今夢を見ていると自覚するようになったしまった。

明晰夢——以前に一度自分なりに調べた時に知った言葉。

今自分が夢の中にいると自覚することによって、夢の内容をある程度コントロールできたりするという。

夢の中ならば好きなことができる。正に文字通り夢のようなその言葉にありすは興味を惹か

れ、ならばと何度か試したことがある。

しかしこれもまた不思議なことに、繰り返し見る夢以外ではそれを認識することはできず、そして肝心の件の夢ではどれだけ念じたところでそれは叶わなかった。

ここまでくると、あれは夢ではなくて誰かに映像を見せられているのではないのだろうか、とさえ思えてくる。

誰が？ 何のために？

最近はずっとそんなことを考えていて、おかげで学校で先生に注意されたり、レッスンでトレーナーさんに怒られてしまったりと、ろくなことがない。

夢占いというものも調べてみたけれど、到底信用できるような結果は得られなかった。

元々占いというものをそこまで信じていないから当然かと、ありすは思う。

いい加減誰かに相談してみるべきだろうか。文香さん辺りなら茶化さずに聞いてくれるかもしれないと、そんなことを考えている時だった。

「？ 今、何か影が見えたような——」

事務所へと向かう通り慣れた道。オフィスビルや店舗が建ち並ぶその中に、時折その間を抜ける小径がある。

いつものように、用はなくなるとなんとなく覗いてみたその先で何かが動いたように見えて、ありすが足を止めた。